



2024（令和6）年 2月 発行
（編集）愛光本部企画室
（TEL）043-484-6391
（メール）<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

今月は、法人内の二カ所の事業所で新型コロナウイルス感染症のクラスターが発生しました。幸いにも、症状が重篤化する利用者はいませんでした。

このような時、職員が感染し出勤する人数が足りなくなってしまうと、ケアの質が低下し、利用者を護ることができなくなってしまいます。

そうならないように、正しいやり方での手洗いと手指消毒など、あらためて、日常の感染対策に努めてまいります。

□事業経過など（2024.1.1～1.31）

日	曜	
4	木	辞令交付式/本部スタッフ会議/本部実績会議
5	金	令和6年度新入職員懇親会
9	火	業務執行会議/衛生管理委員会/広報委員会/防災委員会
10	水	コ・ヒューマントレーニング/感染症対策研修/地域食堂委員会
11	木	メンター委員会/GHPT
12	金	小学校書初め展佐倉市長来訪
15	月	嚙下研修
16	火	佐倉圏域実績会議
17	水	地域食堂ともいき(お弁当販売)/栄養ケア会議
18	木	リスクマネジメント委員会/福祉避難所情報伝達訓練
19	金	ボランティア委員会/後援会運営委員会
20	土	理事会/山王みらいP
22	月	嚙下研修
23	火	研修委員会
24	水	障害者支援事業部実績会議/財務P/地域福祉事業部実績会議
25	木	高齢者福祉事業部実績会議/はちす苑経営改善P
27	土	ほっとタイム「桂文雀独演会」
29	月	嚙下研修
30	火	法人コンプライアンス委員会

■おもな出来事

□障害者相談支援事業所「かけはし」開所

令和6年1月1日に障害者相談支援事業所「かけはし」が開所されました。佐倉市宮前にある佐倉市よもぎの園2階に事務所を構え、管理者1名と相談支援専門員1名の計2名で運営開始しています。

佐倉市社会福祉協議会が策定した“ともに歩むふくしプラン4（第6次佐倉市地域福祉活動計画）”では佐倉市を日常生活圏域で5圏域に分けており、これまで佐倉圏域以外の4圏域（志津北部圏域、志津南部圏域、臼井・千代田圏域、南部圏域）には相談支援事業所が設置されていましたが佐倉圏域には相談支援事業所がありませんでした。今回佐倉圏域では初となる相談支援事業所の開所は、この地区の地域福祉推進に於いて大変意義があることだと思います。

相談支援事業所が不足している佐倉圏域で障害を抱え困っている方々の支援を1件ずつ誠実に丁寧に真摯に対応することで、地域に根付き、ニーズを汲み取ることができるよう頑張りたいと思います。

（かけはし 管理者 戸室 輝大）

■月報から

□新年会

26日にルミエール新年会が行われた。今回の新しい試みは全員参加のホーム別対抗すごろく大会である。利用者が順番にサイコロを振り、出た目をホームごとにポイント加算していくシステムであるがこれが思ったより楽しい。一番の理由は誰でもサイコロを振ることができることである。サイコロを振るのが難しい利用者でも職員と一緒にサイコロを投げたり落としたりすれば必ず目が出てポイントが積み重ねられる。ホーム一丸となって盛り上がり優勝したホームには特別なお菓子が景品として提供された。すごろく大会が終わった後は、ホームでお汁粉が提供され冬の味覚で利用者は笑顔で召し上がっていた。

（ルミエール課長 原 宏之）

□初詣に行こう！

12月29日から1月3日までは冬休み。この間にできるだけ多くの利用者を連れて地域の神社に初詣に行こうと企画した。近場で駐車場があり、混雑せず、お賽銭を投げて、鈴を鳴らすことができ、最後にコンビニにも寄れて・・・と、この条件に一番近いと思われる神社を見つけ、連日何度も車を走らせた。昨年通院を繰り返していた利用者は、「病気をしませんように。」 作業が好きな利用者は「作業頑張ります。」と思いきいに願いを込めて・・・神社に来た、初詣に来たと実感してもらえたのではないかなと思う。しかし、そのあと寄ったコンビニでの買い物の方が、皆さんとっても喜んでいただようにも見えました。

（めいわ課長 中田 憲一郎）

□令和5年度 満足度調査報告

利用者（家族）が求めているサービスの把握と現場の意識向上を目的に満足度調査のアンケートを実施。今年度は6項目の設問を設定することとした。①職員の基本姿勢について②個別支援計画について③連絡手段について④環境について⑤作業内容について⑥クラブ・余暇活動についてである。配布数28人に対して回答が26人と回収率は、高く肯定的な印象を持たれている方が大半という結果であった。

昨年度の調査で“利用時の様子が分かり難い”との意見を受け、余暇活動中の姿をSNSを通じて画像や動画を送信したことによりそのような意見は無くなったが、新たに作業の活動状況が知りたいとの意見や見学を希望したいとの声が挙がっている。

見学については、根郷通所センターでの活動時間は“利用者にとって家庭とのメリハリをつけるための貴重な時間”であることの理解を求め、見学の頻度などを配慮して下さるようお願いをしている。

今年度の調査では“家族支援を念頭に置いた支援体制の構築”のためショートステイについての意見を聞く場を設けることとした。厳しい意見からお礼の言葉まで、様々な意見を頂戴することができたため各施設に原文のままフィードバックしている。

（めいわ通所部所長 菊地 暁生）

□第三者委員活動

13日 第三者委員の四方田委員が来所し、6名の利用者と個別面談を行った。職員に対する要望やご自身の生活上の目標、入所してご家族にあまり会えなくなってしまった寂しさ、帰省して嬉しかった話、横浜への個別外出を楽しみにしていることなど、沢山の話を聞いていただいた。四方田委員とお会いできるのを楽しみにしている利用者も多く、「お話を聞いてもらい嬉しかった。」「スッキリしました。」など多くの笑顔がみられた。

（リホープ課長 稲垣 直子）

□新成人を祝って

最近では毎年、特別支援学校や盲学校の卒業生を受け入れることができている。その為、今年も新成人になる利用者が2名おり、新年会では皆に紹介をした。新成人からはこれからの抱負も述べられ皆から祝福されていた。次年度も新しく卒業生が加わる予定なので毎年新成人のお祝いが出来そうである。新年会では、ここ数年は“おめでたい焼き”を作っていたが今回は“大判焼き”を皆に振舞った。

職員が業務用の大判焼き機を使いながら定番の“あんこ”や変わり種の“明太ポテト”など数種類の味を用意して四苦八苦ししながら皆からの注文を受け付けながら楽しんだ。コロナをきっかけに始めた企画であるがすっかり皆には浸透したようで、「次は何を作るの?」「〇〇をみんなで食べたい」とリクエストも増えてきている。このような余暇行事は仕事への活力も生み出しているようで良い息抜きになっているようである。

（佐倉市よもぎの園主任 近藤 真一）

□当事者の視点を —佐倉市総合支援協議会精神部会—

障害者総合支援法第89条の3には「地方公共団体は、障害者等への支援体制整備の協議会を置くよう」定められている。佐倉市においても佐倉市総合支援協議会が組織されており、協議会は更に5つの専門部会を設けている。

そのなかに精神障害福祉分野を担当する精神部会がある。市内の相談支援事業所、精神科を持つ病院のソーシャルワーカー、保健所の精神保健担当者、障害福祉事業所などからスタッフが参画している。

これまで、精神疾患について学ぶ市民講座の開催を軸に調査活動や啓蒙活動を実施してきたが、ここに精神疾患当事者は1名のみ。圧倒的に支援者が多く、これまでの活動が当事者の“マス”を反映できていたかといえば自信はない。そこで今年度、精神疾患当事者に集まってもらえる機会を作り、より当事者の視点を取り入れたいという動きが起こった。その第一回の会合が1月15日に行われ、5名の当事者が集まった。もちろんワークショップかぶらぎからも、利用者が1名参加した。

この日は顔合わせの意味もあり、ざっくばらんに行政福祉サービスや暮らしの中の困難などを話し合った。初回という緊張感のなかであったがまさに“当事者視点”と思える意見が早速出され、今後に期待できる会合となった。この先、人数をもう少し増やしていき、マスを反映させるべく、多様なバックボーンを持つ当事者の参加を求めている。

(ワークショップかぶらぎ主任 宮部 和樹)

□入居者の状況

ジョーの家では、入居者の年齢層が上がり、健康面への注意がますます重要になっている。定期受診や健康診断の結果に基づき、ホームでの生活継続をサポートする取り組みを行っている。事業所に通所されている入居者は、ご自身のこだわりが強く生活リズム（夜、翌日の弁当作り等でベッドではなく座ったまま寝てしまう等）が乱れていた。その結果、身体の傾きや睡眠不足などの問題が生じ、腰痛を訴えるようになり、整形外科を受診した。受診の結果、年相応の腰椎滑り症と診断されたが、日常生活に制限はないとのことであった。

今回の受診は、ご自身の生活習慣を見直すきっかけとなった。ご本人、ご家族に状況を説明し、「ベッドでの睡眠」「夜遅くまでかかっていた弁当作りをやめ、事業所で弁当を注文する」に変更し、これらの対策により、腰痛が改善されることを期待している。これらの取り組みを通じて、入居者が健康で自立した生活を送れるよう、今後も努力していきたい。

(ジョーの家 高橋 健)

□2024年スタート

冬休みの帰省をしている方もいて、すこし静かになった山王の家で年越しをする方たちが年末年始をどう過ごすかと楽しみにしていたが、いざ新年を迎え、愛光神社でおみくじを引いたり、美味しいランチを食べに行ったり・・・のんびり正月気分を満喫していた。

(山王の家管理者 岡本 綾子)

□「お正月おせち料理」

元旦の昼食は漆塗りの松花堂弁当でおせち料理をご用意した。

栗きんとんの栗は勝ち栗と呼ばれ金運・勝負運を上昇させる意味が込められている。紅白なますは紅白の水引きをイメージし、一家の平和を願う。細く切った大根と人で表現している。利用者が一番はじめに瞳を引き付けるのは『マグロの刺身』である。マグロは利用者にとって一番のご馳走である。

2日の『三平汁』のだしは鮭の皮でとったおだしをベースに旨味を凝縮している。海の恵みの魚の皮から抽出されたコラーゲンはきっと利用者の骨に染み入り『骨を丈夫にするはず！』と信じる気持ち強い。

『明けましておめでとうございます。』と、いつもの新年の挨拶が出来て良かったと思う。そして、利用者もはちす苑でお正月を迎えて良かったと思って頂けたら職員として嬉しく思う。

(はちす苑 管理栄養士 江口 貴子)

□ニューイヤーファミリーコンサート

1月28日(日)音葉ウインド・オーケストラの協力のもと、4年ぶり3回目となるファミリーコンサートを開催した。生演奏(本物)!是非子どもに聞かせたい。と、事前申し込みも多く、楽しみにされている様子が見受けられた。

「アンパンマンマーチ」からはじまり、「生命の奇跡」「ジャンボリミッキー」など子どもから大人まで楽しめるプログラム。テレビやスピーカーから流れてくる音楽とは違う感覚を感じたのか、演奏が始まると、子どもたちは真剣な顔で聞き入っていた。プログラムはイントロクイズと一緒にダンスが出来る曲など盛りだくさんの内容。事前公募で集まったダンスの上手な小学生ダンス隊とニコニコしながら、とにかくノリノリでジャンプする幼児たちが会場をさらに盛り上げた。これは、児童センターならではのコラボレーション。とても微笑ましく、見ている大人たちも自然と笑顔になる場面だった。生演奏を聴ける機会はそう多くない。少しでも多くの子ども達、また地域の方にいつも来慣れている児童センターで気軽にコンサートを楽しんでもらおうというこの企画。当日は、乳幼児親子、小学生、祖父母も多くみられ約120名の来場となった。今年度の児童センターの企画イベントでは1番の来場者数だった。

(南部児童センターインストラクター 吉田 知加子)

□打ち解けるきっかけ(第二根郷学童保育所の報告から)

学童に帰ってきて最初に宿題や読書をする時間。今月から利用を始めた児童が、「同じクラスの女子がいない…」としょんぼりしており、宿題もいつも職員と一緒にないと進められずにいた。そんな日が続く中、違うクラスの女児が「自分のが終わったら教えてあげるから大丈夫だよ」と声をかけてくれた。しょんぼりしていた児童は少し照れたような表情を浮かべ「え～じゃあ自分でやるよお」「教えるから待っててよ」と会話が続いたので、職員は「じゃあ任せた。分からなかったら聞いてね」とその場を離れ、見守ることにした。

それからは、職員に頼ることもあるが、まずは自分たちで頑張って進められるようになった。声を掛けてくれた女児とも仲良くなり、時折言い合いもして、だいぶ打ち解けてきたようである。(第二根郷学童保育所)

(学童保育所主任 小出 博美)

□桂文雀 新春落語独演会

1月27日 センターのA棟大広間にて、愛光後援会「愛の灯台基金」主催による、「桂文雀 新春落語独演会」が開かれた。センターには、何日も前から多くの問い合わせもあり、当日の南部地域福祉センターの会場は、早くから約140名の観客が来場、満員となった。会場のすべてのお客様を引き付けるように、落語の演目が披露された。前日および当日の朝早くから、舞台作りと音響まで、ボランティアの協力と、スタッフの入念な準備のおかげで「桂文雀 独演会」は大成功。来場された多くの方は、とても満足そうに会場を後にしていた。

(南部地域福祉センター 青山 秀人)

□さきいか研修会「コロナ明け！顔の見える関係再び！」

24日(水) 佐倉厚生園病院にて佐倉地域・南部地域医療介護連携の会(通称さきいか)を開催した。今回は「コロナ明け！顔の見える関係再び！」と題した意見交換会。参加者は医療介護の関係者約60名となった。前半は圏域内の事業所9か所による業務内容の紹介、後半は在宅医療介護の連携をテーマとしたグループワークを行った。

グループワークでは職種やサービス内容は異なるが、個人の課題にどのように向き合い、どのように解決すれば本人らしく生活できるのかなど、それぞれの強みを生かした話し合いがされていた。個別課題やニーズの多様化によりサービスの限界を感じながらも、「こういうツールがあれば質の高い支援ができるのではないか」「このような社会資源が今後必要かもしれない」といった前向きな意見もあった。

参加者からは、「いつも書面でのやりとりだった先生と直接話せて有意義な時間がすごせた」「ケアマネジャーの仕事内容がより深く聞けて参考になった」との感想が聞かれ、医療、介護の連携の重要性を感じられた。今後地域包括ケアシステムを推進していく上で、医療介護連携の強化はさらに重要な柱となるのではないかとと思われる。お互いの職種、役割を尊重しつつ質の高い連携が図れるよう継続して取り組んでいきたい。

(総合相談センター所長 森 由美子)